座談会で見えてきた「可能性」

住む場所に依らないケアの本質 スタッフ全員参加型のケアマネジメントを

利用者にとって最善のケアをするために、施設ケアマネジメントにはまだ伸びしろがあるようだ。制度設計や、集団が一か所で暮らすために全体最適も意識しなくてはならない施設の特性上、ケアマネジャーだけでこの伸びしろを埋めるのは難しい面もある。しかし、利用者の笑顔が増えることで、ケアマネジャーの達成感ややりがいが増すことも確かだろう。そこで、施設と居宅両方を経験しているケアマネジャー４名に参加していただき、施設ケアマネジメントの本質と可能性に関する座談会を開催した。

取材協力 ▶

特養
大森生澄さん
社会福祉法人創和会 特別養護老人ホームまろにえ四季の里 介護支援専門員。特養の介護士、居宅のケアマネジャーに従事後、現職（兼務）。多職種が汲み取った利用者の意向をケアに生かすため、多職種との情報共有に注力。

老健
柿島里香さん
社会福祉法人静和会 介護老人保健施設 梅名の里 副施設長。居宅や地域包括支援センターでケアマネジャーとして従事後、現職。利用者の思いを中心に、多職種が職能を追求してチームでケアマネジメントをする体制づくりに注力。

居宅
細井陽介さん
株式会社アモール アモール居宅介護支援事業所 介護支援専門員。老健で介護職、サ高住でケアマネジャー（兼務）に従事後、現職。利用者の望む暮らしを目指し、自分の価値観を押し付けず、利用者を尊重する支援に注力。

老健
益山知佳子さん
社会医療法人社団昭愛会 水野介護老人保健施設 介護支援専門員。居宅のケアマネジャーに従事後、現職（専従）。本人は自宅に帰りたいが家族の事情で帰れない等の課題に直面し、本人の意思が尊重される支援を目指している。

生活を「作業」にしない 職能を生かし「小さな幸せ」重ねる

――施設は団体行動で、利用者もケアスタッフも決められたルールやスケジュールに則って動くという特性があります。その中でご本人の価値観や意向を尊重したケアマネジメントをするには、どうすれば良いのでしょうか？

柿島さん　毎日の生活やケアを、「作業」にしないという意識が大切だと思います。ご本人の希望で施設に入所されている方は少なく、家族のためとか、その人なりの理由で「大いなる諦め」をしていらっしゃるんですね。施設と居宅のケアマネジャーに聞いた言葉を引用すると、「その方が何を再び取り戻したいのかを確認したい。それが家族との関係なのか、ご本人の体力なのか、精神機能なのかは、その方によって違い、それが個別性。それを理解し目標にすることがケアマネジャーの仕事」。利用者さんが人生を諦めたままにせず、笑顔になるためにあるのがケアマネジメントなのではないでしょうか。

大森さん　日常の中に「小さな幸せ」や「小さな嬉しさ」を積み重ねていけるケアができるといいなと思います。どんなことで幸せや嬉しさを感じるかは人それぞれです。それを日常生活の中で見つけてあげられるように、私自身が直接支援をしている時や、現場のスタッフの情報から、そのためには何ができるかをスタッフ同士で話したりします。

細井さん　多職種との連携では、居宅の方がフラットな関係性でそれぞれの専門性を生かしながら、ご本人の思いにどう向き合うかを話していると思います。また、施設では多職種で施設全体の業務をするので、例えば食事時間がご自身の生活に合わない方がいつも食事の時間に現れないと、問題になってしまうこともあります。でも、自宅だったら、その方は食べたい時間に食べることができますよね。施設だと、居宅よりもどうしてもできないことが増えてしまうので、それをどのように乗り越えるのかが課題だと思います。

益山さん　老健はご自宅に帰ることを前提にした施設なので、ご自宅に帰ってその人の好きなことや望む生活ができる